
哲学書

加倉千早

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哲学書

【コード】

N5697Q

【作者名】

加倉千早

【あらすじ】

総ての哲学ファンに捧ぐ！

哲学とは、見ている世界の広さと深さを競う学問である。
従って、その優劣は『眼』で決まることになる。

いくら知識を身に着けようとも、いくら論理を磨こうとも、物事の本質を見据える『眼』を持たなければ同じである。

「これが私の世界だ！」と言わんばかりに真理を説こうとする哲学書を、どれだけ読み返そうとも、読み手は著者との差を埋めることが出来ない。

哲学書とは、それを書いた人間の自慢話であって、教則本ではないからだ。

真理とは、それを見据える『眼』を持った者だけに与えられる、宝珠である。

どれだけの論理を積み上げようと、真理を見据える『眼』を持たない者に、真理を見せることは出来ない。

哲学書には、「こんな宝珠を持っている」という自慢話が書かれている。

読み手は、その宝珠に触れたわけでもないのに、積み上げられた論理に酔い、絵に描いた餅を真理だと思い込む。

論理に酔うことが目的であるなら、それも悪くはないだろう。
酔わせてくれる哲学書は、秀逸な娯楽本だと言える。

しかし、この世界で『眼』の確かさを競いたいのなら、話は違ってくる。

そもそも、論理などというものは、真理を説明するための道具に過ぎない。
積み上げられた論理の先に真理が見えてくる、というようなことはない、
ない、と思っていたほうがいい。

論理に酔えば、真理を見失う。

哲人を志す者にとって、哲学書は、なんの飾り気もない石段であるべきである。

踏み越えて、ゆけ。

尚、ここで述べていることが絵に描いた餅であることも、当然の帰結と言える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5697q/>

哲学書

2011年2月2日02時17分発行